

# 日本語慣用句の記述的規範

## — 300 個の動詞慣用句の親密度・透明度・予測性 —

陳 雯

### 要 旨

Titone & Connine (1994b) によると、慣用句の認知処理においては様々な要因が影響を及ぼすため、慣用句の認知過程を解明するには慣用句選出の際に、それらの要因をできるだけ統一する必要がある。Titone & Connine (1994b) と Tabossi 他 (2011) はそれぞれ英語慣用句とイタリア語慣用句を対象に、慣用句の親密度、構成性、予測性などの性質について調査を行い、慣用句の認知過程を研究する際の慣用句選出の基準となるデータを提供している。一方で、日本語慣用句を対象としたこのような研究は未だ見られない。本稿は Titone & Connine (1994b) や Tabossi 他 (2011) を参考に、まず 1140 個の日本語動詞慣用句を対象に親密度調査を行った。次に、日本語母語話者の親密度判断に基づき、親密度が上位 300 の慣用句を対象に透明度調査と予測性調査を行った。最後に、親密度・透明度・予測性の相関関係について分析を行った。本稿の結果は、日本語慣用句を対象とする今後の実験研究のために、慣用句選出の際の参考となる親密度、透明度と予測性のデータを提供することができる。

### キーワード

日本語動詞慣用句 親密度 透明度 予測性 記述的規範

### 0 はじめに

慣用句とは、「二つ以上の単語が一続きに、または相応じて用いられ、その結合が、全体として、ある固定した意味を表すものを指す」(宮地 1985:62)。例えば、「足を引っ張る」という表現の文字通りの意味は「人の下肢を自分のほうへ引き寄せる」であるが、全体としては「人の邪魔をする」という慣用句的な意味を表す。慣用句は個々の構成要素の意味から句全体の意味を推測しにくいという点において特徴的である。慣用句の認知処理(理解・産出)に関して、これまで様々な研究がされてきたが、こうした研究においては英語慣用句を対象とするものが多く(Swinney & Cutler 1979, Gibbs et al. 1989, Titone & Connine 1994a, Titone & Connine 1994b, Cooper 1999, Conklin & Schmitt 2008 など)、日本語慣用句に関する研究は管見の限り非常に少ない。構成語の意味が分かっても慣用的意味が分かるとは限らないため、慣用句の認知過程は一般表現と比べより複雑であり、個々の構成語の意味から句全体の意味を合成するという構成的処理と、心内辞書から慣用的な意味を直接抽

出すという非構成的処理が両方向行われている (Titone & Connine 1999)。

Titone & Connine (1994b) によると、慣用句の認知処理においては様々な要因が影響を及ぼすため、慣用句の認知過程を解明するには慣用句選出の際に、それらの要因をできるだけ統一する必要があるが、従来の慣用句研究を見ると、2 つ以上の要因を考慮に入れている研究は少ない。Titone & Connine (1994b) は 171 個の英語慣用句を対象に、慣用句の親密度、構成性、予測性と字義性といった 4 つの側面から調査を行い、英語慣用句を選出する際の基準となるデータを提供している。Libben & Titone (2008) は Titone & Connine (1994b) を参考に、210 個の英語慣用句の親密度、有意味性、構成性、予測性、字義性、動詞頻度と名詞頻度といった側面について調査を行い、それぞれの性質の間の相関関係について分析した。また、Tabossi 他 (2011) は Titone & Connine (1994b) など参考に、245 個のイタリア語慣用句を対象に、長さ、知識、親密度、習得時期、予測性、統語的固定性、字義性と構成性といった 8 つの側面について調査を行い、イタリア語慣用句を選出する際の参考となるデータを提示している。一方で、日本語慣用句に関しては、このような基礎調査が未だに行われておらず、日本語慣用句を対象とする実験研究を行う際に、慣用句の選出基準となるデータが不足しているのが現状である。

そこで、本稿は、Titone & Connine (1994b)、Libben & Titone (2008)、Tabossi 他 (2011) を参考に、日本語慣用句を対象に、親密度、透明度、予測性といった 3 つの性質を中心に調査を行い、それぞれの側面について相関関係を分析し、日本語慣用句を対象とする今後の研究のために、慣用句選出の際の参考となるデータを提供することを目的とする。親密度を調査対象とする理由は、第一言語か第二言語かに関わらず、親密度が慣用句の理解過程と産出過程に影響を与えると言われているためである (Nippold & Rudzinski 1993, Tabossi 他 2009, 陳 2015)。透明度<sup>1</sup>を調査対象とする理由は 2 つある。1 つ目に、慣用句を一般表現と区別する際の最も重要な特徴は意味的特徴である。慣用句の場合、文字通りの意味と慣用的意味が異なり、個々の構成語の意味から表現全体が表す慣用的意味を直接推測することは困難である。この特徴は慣用句の透明度と深く関連している (Nunberg 他 1994)。2 つ目に、先行研究において、第一言語か第二言語かに関わらず、透明度は慣用句の理解過程に影響を与えると指摘されている (Nippold & Rudzinski 1993, Ishida 2009, Aljabri 2013)。

<sup>1</sup> 英語慣用句に関する先行研究において、透明度は慣用句の文字通りの意味と慣用的意味の関連性のことであり (Nippold & Rudzinski 1993, Keysar & Bly 1995)、構成性は慣用句を構成する個々の単語が持つ意味と慣用句全体としての意味との間に関連性があるか否かによって判断される (Gibbs & Nayak 1989, Titone & Connine 1994b)。

Abel (2003) によると、両者は理論上完全に一致しないが、話者が判断を行う際は区別しにくいという。Gibbs & Nayak (1989) は母語話者を対象に透明度判断と構成性判断を行い、両者の相関について分析を行った。結果、透明度判断と構成性判断にやや強い相関があることが分かった ( $r=.56^*$ )。更に、Cieślicka (2013) は 7 段階の透明度判断 (1: 非透明的; 7: 透明的) と構成性判断 (1: 非構成的; 7: 構成的) を行った結果、両者が重なっていることが分かった。慣用句の文字通りの意味は構成語の意味が含まれていると考えられるため、透明度は構成性と類似している。

Titone & Connine (1994b) は構成性を調査対象としているが、本稿は透明度を構成性と類似する概念として捉え、透明度を調査対象とする。

予測性に関して、Cacciari & Tabossi (1988) は慣用句に予測性の高いものと予測性の低いものがあり、慣用句の予測性は慣用句の認知処理に影響を及ぼす重要な要因であると指摘している。本稿の結果を参考に、今後の研究は実験対象の候補となれる慣用句項目を選出することができる。ただし、実験目的や実験方法に合わせ、研究によって更に字義性、動詞の使用頻度、慣用句の長さといった性質について確認する必要がある場合もある。

## 1 先行研究

### 1.1 親密度

親密度 (familiarity) は 1 人の言語使用者がある表現に接触する頻度、またはその人がある表現をどの程度知っているかを表す概念である。Titone & Connine (1994b) は 171 個の英語慣用句の親密度を調べるために、英語母語話者を対象に 2 つの調査を行った。1 つ目の調査において、慣用句をどれぐらいの頻度で見たり聞いたり使用したりするかを 7 段階評価 (1:一回もない; 7:よく接触する) で協力者に判断してもらった。2 つ目の調査において、慣用句の意味をどの程度知っているかを 7 段階評価 (1:意味を知らない; 7:よく知っている) で協力者に判断してもらった。結果、2 つの調査の結果の間に強い相関があったため ( $r=.91^*$ )、この研究は親密度の判断の指標を表現の接触頻度、またはどの程度表現の意味を知っているかのどちらかにすることができると主張した。ところが、親密度と近い概念に使用頻度 (frequency) という用語を用いる研究もある。使用頻度はある慣用句がどの程度 1 つの言語に現れるかを示すのに対し、親密度は 1 人の言語使用者がある慣用句に接触する頻度のことを指すため、両者は全く同じ概念ではない。ただし、使用頻度の高い表現は頻度の低い表現よりも親密度が高いと考えられるため、この 2 つの概念は対立的なものではなく、関連していると思われる (Liu 2008: 77-78)。

Nippold & Rudzinski (1993) は母語話者の言語発達に着目し、小学生、中学生、高校生及び大学生を対象に 2 つの慣用句実験を行った。実験 1 において大学生は高校生より慣用句の親密度をより高く判断していることが分かり、実験 2 においては年齢の増長につれ、慣用句の意味解釈テストにおける協力者の得点が良くなることと、親密度の高い慣用句は親密度の低い慣用句より解釈しやすいことが分かった。この研究は接触の観点から、子供は年齢の増長につれ慣用句の接触機会 (exposure) が増えると同時に慣用句の親密度が上がり、慣用句を解釈する能力も高くなると主張した。

親密度がどのように成人の慣用句の認知処理に影響するかについて、Schweigert (1986) は慣用句を文字通りの意味が読み取られる文脈と慣用句としての意味が読み取られる文脈において読み時間実験を行い、いずれの文脈においても親密度の高い慣用句の読み時間が親密度の低い慣用句より有意に速かったという結果を示し、親密度は慣用句の理解過程を促進する重要な要因として捉えるべきだと述べた。単語を対象とした Lewellen 他 (1993) においても単語の認知処理に親密度が影響し、親密度の高い単語は親密度の低い単語より認知処理が速いという結果が見られた。つまり、親密度は慣用句と単語の認知処理におい

て類似する効果があると考えられる。なお、Libben & Titone (2008) は英語慣用句を対象に 4 つの実験を行い、親密度、構成性、字義性及び動詞頻度などの要因の関係と効果を調べたが、その中で親密度の要因のみが調査方法に関わらず、全てのタスクにおいて一貫して有意な結果を示した。

また、Tabossi 他 (2009) はイタリア語にある非構成的慣用句、構成的慣用句、文字通りの意味しか持たない高頻度の固定表現 *clichés* (イタリア語: *allacciare le cinture*—英語: *fasten the belts*) といった 3 種類の表現を対象に実験を行った。実験の際に、パソコンのスクリーンで各表現を提示し、協力者に表現が自然であるか否かを判断してもらった。結果、表現の種類による相違が見られなかったため、この研究は、慣用句の理解が一般表現の理解より速い理由は、慣用句の親密度が一般表現より高いことにあると主張した。

陳 (2015) は日本語慣用句を対象として産出実験を行い、L2 慣用句の回避現象について検討した。結果、慣用句の親密度<sup>2</sup>は日本語学習者の産出過程に影響することが明らかになり、親密度が高くなると、L2 慣用句の産出率が高くなることが分かった。陳 (2015) は、ある慣用句の親密度が高ければ高いほど、当該慣用句は心内辞書においてより深く刻みこまれ、産出する際により思い出しやすくなると述べている。

以上から、親密度は慣用句の認知処理において重要な役割を果たしていると言え、慣用句の認知処理について実験を行う際には対象となる慣用句の親密度を考慮に入れる必要がある。

## 1.2 透明度

英語慣用句に関する先行研究において、透明度は慣用句の文字通りの意味と慣用的意味の関連性のことであり、文字通りの意味と慣用的意味の関連性が高い慣用句は透明度が高く、文字通りの意味と慣用的意味の間の関連性が低い慣用句は透明度が低い (Gibbs 1987, Nippold & Rudzinski 1993, Keysar & Bly 1995)。例えば、英語慣用句 *go by the book* の文字通りの意味は「本の指示に従う」であるが、慣用句として使用される文脈においては「ルールと規則に従う」の意味を表す。この慣用句は文字通りの意味と慣用的意味と密接な関係を持っているため透明度が高いと判断される。一方で、*keep one's shirt on* は「シャツを着続ける」というのが文字通りの意味であるが、慣用句として使用される際は「冷静なままで過激な反応をしない」という慣用的意味を表す。文字通りの意味と慣用的意味の間は関係を持たないため、*keep one's shirt on* は透明度が低いと判断される (Nippold & Taylor 2002)。

透明度の判断方法について、Nippold & Taylor (2002) は以下のように、英語慣用句 *put one's foot down* の文字通りの意味と慣用的意味を提示した上で、英語母語話者に慣用句の透明度を判断してもらった。Nippold & Taylor (2002) において、複数の協力者の判断結果

---

<sup>2</sup> 陳 (2015) は認知度という用語を用いているが、認知度は本稿における親密度と同様に、「言語使用者がどれぐらいの頻度で慣用句を見聞きするか」が判断基準となっているため、陳 (2015) における認知度は本稿における親密度と同一の概念であると言える。

を平均した後の値が透明度の指標となり、値の低い慣用句は透明度が高いとされ、値の高い慣用句は透明度が低いとされる。

Put one's foot down:

Literal meaning: to place one's foot on the ground

(文字通りの意味：足を地面につける)

Nonliteral meaning: to insist on something and not change one's mind

(慣用的意味：意見を曲げない強い姿勢を示す)

The meanings of this idiom are: 1 = closely related 2 = somewhat related 3 = not related

(この慣用句の 2 つの意味は：1=強く関連している 2=やや関連している 3=関連していない)

Nippold & Taylor (2002:387)<sup>3</sup>

Nippold & Taylor (2002) は Nippold & Rudzinski (1993) と同様に母語話者の言語発達に着目しており、この研究は 11 歳の児童と 16 歳の青年を対象に実験を行った。結果、理解テストにおいて、児童の場合、一番意味が理解しやすい慣用句は親密度と透明度の高い慣用句であり、青年の場合、一番意味が理解しやすい慣用句は透明度の高い慣用句であり、親密度の効果はなかった。この研究から分かるように、年齢に関わらず、透明度は第一言語の慣用句の理解過程を促進させ、透明度の高い慣用句は透明度の低い慣用句より理解しやすいと考えられる。

一方、Ishida (2009) は日本語を母語とする英語学習者を対象に、慣用句の透明度と文脈の情報がどのように未知の慣用句の理解に影響するかについて調査を行った。実験において、学習者はまず慣用句の親密度調査に参加し、その後、文脈あり・なしの 2 条件において慣用句を読んで理解し、意味解釈テスト、意味選択テスト、英語能力テストを行った。結果、学習者の英語能力による得点に違いが見られず、解釈テストと選択テストの結果が一致し、文脈あり・なしに関わらず、透明度の高い慣用句は低い慣用句より理解・解釈しやすいことが分かった。

また、Aljabri (2013) は慣用句の親密度と透明度に着目し、アラビア語を母語とする大学 1 年生と 4 年生の英語学習者を対象に、親密度調査、透明度調査と理解テストを行った。結果、4 年生は 1 年生より慣用句の親密度を高く判断し、理解テストにおける得点も有意に高かった。一方で、透明度判断において 1 年生と 4 年生の間に差は見られなかったが、1 年生は透明度の低い慣用句より透明度の高い慣用句のほうが理解しやすいのに対し、4 年生は透明度の低い慣用句と透明度の高い慣用句両方がよく理解できた。

以上の先行研究は全て英語慣用句を対象としているが、陳 (2016) は慣用句の透明度と

<sup>3</sup> 括弧の中の日本語は筆者が訳したものである。

親密度の関係を明らかにするために、45 個の日本語慣用句を用い、日本語母語話者と日本語学習者を対象に親密度調査と透明度調査を行った。結果、母語話者か学習者かに関わらず、1 つの慣用句の親密度が高くなると、その慣用句の透明度判断も高くなることが分かった。更に、学習者の場合、親密度の効果はより顕著であることが分かった。透明度判断において親密度が影響するという結果を踏まえ、陳 (2016) は慣用句の認知処理における透明度と親密度の要因を別々に扱うのではなく、両者の関連性について考えなければならないと主張した。

以上を踏まえ、慣用句の認知処理における透明度の効果について実験を行う場合、透明度を調査する必要があるのは言うまでもないが、透明度以外の要因について実験を行う場合は、対象となる慣用句の透明度を統一する必要があると考えられる。

### 1.3 予測性

Cacciari & Tabossi (1988) は慣用句に予測性の高いものと予測性の低いものがあり、慣用句の予測性は慣用句の認知処理に影響を及ぼす重要な要因であると指摘している。予測性というのは、慣用句形式を最後まで見ていない話者がその未完成の慣用句を完成する確率のことである (Titone & Connine 1994b:252)。例えば、英語母語話者に以下の 2 つの文を提示し、空欄を完成してもらった場合、例 (a) において殆どの母語話者は慣用句 *in seventh heaven* (文字通りの意味: 7 つ目の天国にいる; 慣用的意味: 幸福状態である) を想起し、*heaven* を記入するのに対し、例 (b) において *go to the devil* (文字通りの意味: 悪魔に行く; 慣用的意味: 命令形で「くたばれ!」を表す) を想起する母語話者は少なく、*devil* を記入する母語話者は少ない。よって、英語慣用句 *in seventh heaven* は *go to the devil* と比べ予測性が高いと考えられる。

(a) After the excellent performance, the tennis player was in seventh\_\_\_\_\_.

(b) He told him to go to the\_\_\_\_\_.

Cacciari & Tabossi (1988:671-675)

Cacciari & Tabossi (1988) と Titone & Connine (1994a) はプライミング実験を行い、慣用句が含まれている文を音声で流し、協力者に音声を聞かせながら、(1) 慣用句の慣用的意味と関連する単語 (*happy*)、(2) 最後の単語 (例えば、*in seventh heaven* の中の *heaven*) の文字通りの意味と関連する単語 (*saint*)、(3) 慣用句また構成語のいずれとも意味的に関連のない単語 (*umbrella*)、といった 3 種類の単語を見せ、(1) ~ (3) の単語を対象に語彙性判断タスク (*lexical decision*) を行ってもらった。結果、予測性が (1) と (2) の反応時間に影響し、予測性の高い慣用句は予測性の低い慣用句と比べ、慣用的意味も文字通りの意味もより速く抽出されることが分かった。この 2 つの研究の結果から分かるように、慣用句の理解過程において予測性が影響を及ぼすため、慣用句の認知処理を研究する際は

対象となる慣用句の予測性を考慮に入れなければならない。

## 2 調査方法

1 節で見てきたように、慣用句の親密度、透明度と予測性は慣用句の認知処理に影響を与える重要な要因であるため、本稿はこの 3 つの性質を中心に調査を行う。本稿は日本語動詞慣用句を対象に調査するが、その理由は、日本語慣用句の中に、動詞慣用句が一番多いためである(宮地 1982)。また、慣用句の認知処理に関する先行研究は、協力者にとって既知である慣用句、つまり比較的親密度の高い慣用句を対象としている研究が多いため、本稿はまず辞書から抽出した 1140 個の動詞慣用句を対象に親密度調査を行い、その後、親密度調査の結果に基づき、親密度が上位 300 個の慣用句を対象に更に透明度調査と予測性調査を行う。

### 2.1 親密度調査

#### 項目

まず、『三省堂 故事ことわざ・慣用句辞典 第二版』(2010) から、動詞慣用句を 1140 個抽出した<sup>4</sup>。例えば、「腹が立つ/足を運ぶ/耳に入る」といった動詞慣用句を抽出した。全ての慣用句をランダムに 30 リストに振り分けた後に、ダミー慣用句 5 個(首を伸ばす/花が落ちる/足を汚す/ろうそくを燃やす/古着を着る<sup>5</sup>)を作成し、各リストに入れた<sup>6</sup>。ダミー慣用句は形式的に動詞慣用句と類似し、自由な語結合としての意味・用法はあるが、本来なら文字通りの意味しか表すことができず、慣用的意味を持たない。それらの表現をダミー慣用句として使用する際に、それぞれに慣用的な意味を付与し、偽作の慣用句として扱う。例えば、「花が落ちる」は元々文字通りの意味しか表さないが、ダミー慣用句として示す際は「人に恋をするたとえ」という偽造の意味を示す。つまり、ダミー慣用句は文字通りの意味は解釈可能であるが、慣用句として日本語に存在しない。協力者が指示通りに、表現の形式のみではなく慣用句としての意味も合わせて読んだ上で親密度を判断するのであれば、ダミー慣用句の親密度は低いと思われる。

<sup>4</sup> 協力者が 1 回の参加につき、同じ語彙が含まれる慣用句を 2 回以上見ないように、同じ語彙が含まれる慣用句の数が多い場合は(例えば、「手」/「気」を含む慣用句)数を減らすために、ランダムに対象から排除した。

<sup>5</sup> 偽作の 5 個のダミー慣用句とそれぞれに与えた慣用的意味は以下の通りである。

首を伸ばす：自慢する様子。

花が落ちる：人に恋をするたとえ。

足を汚す：悪いことをする。

ろうそくを燃やす：精いっぱい何かをする。

古着を着る：一度行った行為を再び行う。

<sup>6</sup> 本稿は Titone & Connine (1994b) と異なり、協力者と対面する形式で調査を行うのではなく、オンラインでアンケート調査を依頼する形式を取るが、多くのデータが収集できるメリットがある一方で、協力者が説明文の内容を理解しているか否かを確認することができないというデメリットもある。もし協力者が説明文の指示通りに判断を行っていない場合、その協力者のデータを採用してはいけない。よって、本稿はダミー慣用句を使用し、ダミー慣用句に対する判断をデータ採用時の基準とする。

## 協力者

親密度調査は 2017 年 4 月～6 月の期間において行った。オンライン調査依頼サイト Lancers<sup>7</sup>を通して 280 人（平均年齢＝41.9, 年齢範囲＝18～68 歳）の日本語母語話者<sup>8</sup>を募集した<sup>9</sup>。ウェブサイトの性質上、協力者の参加を制限することは不可能なので、複数のリストに参加した協力者もいれば、1 つのリストにしか参加していない協力者もいる。リストごとに 20 人～25 人の協力者を募集した。

## 手順

親密度調査の説明文は以下の通りである。

日本語には以下のような、文字通りの意味と慣用句的な意味を持つ表現があります。

「足を引っ張る」

慣用句的な意味 — 「人の邪魔をする」

文字通りの意味 — 「人の下肢を自分のほうへ引き寄せる」

本調査は、各表現を慣用句として、どれぐらいの頻度で見たり聞いたりするかについて判断してもらうものです。判断する時は、以下の 3 点に基づいて判断してください。

1) 慣用句として見たり聞いたりしているかどうか。

全ての表現について、慣用句としての意味が提示されていますので、その意味に基づいて判断してください。文字通りの意味はわかるものの、慣用句としての使い方を一度も見たり聞いたりしていない場合、「一度も見た/聞いたことがない」とします。

2) 見たり聞いたりするというのは日常生活で見たり聞いたりすることや、自分で使ったりすることを含みます。

3) 各表現の接触頻度を 1～7 の数値で表します。数値が高いほど頻度の高いことを意味します。「1」は「一度も見た/聞いたことがない」ことを表し、「7」は「よく見る/聞く」ことを表す。

項目は全部で 43 個ですが、慣用句の意味をよく読んだ上で、1 つの項目にあまり時間をかけずに、直感で判断してください。

<sup>7</sup> ウェブサイトのアドレスは <http://www.lancers.jp> である。

<sup>8</sup> 協力者の募集は 2 回に分けて行った。1 回目の協力者に対しては母語を訪ねていないが、プロフィールの情報を確認した上、全員日本語母語話者と想定される。2 回目の協力者は全員「あなたの母語は？」という項目に「日本語」と答えた。

<sup>9</sup> 小比田・宮本 (2014) では、Lancers をサンプルモデルとして、同じ質問紙を Lancers と紙 (大学生) の両方で実施した結果、両者に差異が検出されず、クラウドソーシングサイトでのアンケート実施が、結果に対して特別な影響を持たないことが示唆された。

協力者は説明文と同意書を読んだ後に、「作業開始」のボタンをクリックし、作業画面に入る。調査項目はウェブページの上部から下部へ順番に表示されている。協力者は1つの慣用句項目に対して、慣用的意味を読んだ後に、1~7の選択肢（1：一度も見た/聞いたことがない；7：よく見聞きする）から1つだけを選んでチェックを入れ、スクロールで次の項目へ進む。

## 2.2 透明度調査

### 項目

透明度調査の際は、先に行った親密度調査において、母語話者によって親密度が高いと判断された上位 300 個の慣用句を対象とした。300 個の慣用句をランダムに 20 リストに振り分けた後に、ダミー慣用句 5 個<sup>10</sup>（油を嘔む/風を撃つ/つるべを蹴る/町を塗る/馬車から落ちる）を作成し、各リストに入れた。更に、慣用句の親密度に偏りがないように、親密度調査において親密度の低いと判断された慣用句 10 個を各リストに加えた。ダミー慣用句は透明度が低いと思われる偽造の日本語慣用句であり、データ採用時の判断基準となる。

### 協力者

透明度調査は 2017 年 7 月～9 月の期間において行った。協力者は Lancens を通して募集し、全部で 500 人（平均年齢=39.2, 年齢範囲=18～71 歳）の日本語母語話者がオンラインで調査に参加した。各リストに 25 人の協力者が参加した。親密度調査と異なり、すべてのリストにおいて、半分の 15 個が、親密度の低い慣用句とダミー慣用句であり、これは各リストにおいて共通である。よって、1 人の協力者が複数のリストに参加している場合、最初に参加したリストの結果のみを採用し、その後解答したリストのデータを採用しないことにした。

### 手順

調査の際に、全ての慣用句に対して、文字通りの意味と慣用句としての意味両方を提示した。慣用句の文字通りの意味を定義する際に、『明鏡国語辞典 第 2 版』（2010）を参考に、個々の構成要素を辞典において調べ、それぞれの見出しから 1 番目に載っている語義を抽出した後に、2 つの意味を結合させた<sup>11</sup>。例えば、「頭に来る」の文字通りの意味は、「頭」の意味「頭部」と、「来る」の意味「近づく」を結合させた後の「頭部に近づく」で

<sup>10</sup> 英語慣用句の研究 (Titone & Connine 1994b, Ishida 2009) の結果を参考に、英語にある親密度の低い、かつ透明度の低い慣用句を 5 個選出し、それらに類似する偽造の日本語慣用句「油を嘔む (話す、愚痴をこぼす) / 風を撃つ (むだ話をする、あてもなくしゃべる) / つるべを蹴る (死ぬ、往生する、命を失う) / 町を塗る (底抜けに大騒ぎをする、盛り場を回る) / 馬車から落ちる (やめたことを再びやり始める)」を作成した。

<sup>11</sup> Grant & Bauer (2004) は辞書における語彙の定義に基づいて慣用句の構成要素の文字通りの意味を定義した。

ある。慣用句の慣用句的意味は『三省堂 故事ことわざ・慣用句辞典 第二版』(2010) から抽出した。透明度調査の説明文は以下の通りである。

日本語には以下の 1 と 2 のような、文字通りの意味と慣用句的な意味を持つ表現があります。その中に、文字通りの意味と慣用句的な意味の間に、高い関連性が感じるものもあれば、あまり関連性が感じないものもあります。

1. 「食が細い」

慣用句的な意味 — 「体質的にたくさん食べることができない様子。」

文字通りの意味 — 「食べることの幅が小さい。」

1 の例において、文字通りの意味は慣用句全体としての意味に似ていると感じられます。「食べることの幅が小さい」は「たくさん食べることができない」と関連しているためです。この場合、「食が細い」という慣用句表現の文字通りの意味と慣用句的な意味の関連性は非常に高いと言えます。

2. 「泡を食う」

慣用句的な意味 — 「驚きあわてる。」

文字通りの意味 — 「液体が空気を包んでできた玉を食べる。」

2 の例において、文字通りの意味は慣用句全体としての意味と関連性が感じにくく、両者の間に関連性はあまり見られないと考えられます。

以下では 30 個の日本語慣用句を提示し、それぞれの表現について、文字通りの意味と慣用句的な意味の間に関連性がどれくらいあると思われるかについて判断してもらいます。提示されている慣用句の文字通りの意味及び慣用句的な意味を読んだ上で、判断してください。

関連性を 1~7 の数値で表します。数値が高いほど関連性の高いことを意味します。「1」は「関連性が非常に低い」ことを表し、「7」は「関連性が非常に高い」ことを表します。

回答に正解はありませんが、上に書いてある説明文をよく読んで理解した上で、あなたの直感で判断してください。

協力者は説明文と同意書を読んだ後に、「作業開始」のボタンをクリックし、作業画面に入る。調査項目はウェブページの上部から下部へ順番に表示されている。協力者は 1 つの慣用句項目に対して、文字通りの意味と慣用的意味を読んだ後に、1~7 の選択肢 (1 :

関連性が非常に低い；7：関連性が非常に高い）から 1 つだけを選んでチェックを入れ、スクロールで次の項目へ進む。1 つのリストに参加する協力者 1 人は全部で 30 個の項目を見て 7 段階の透明度評価を行った。

## 2.3 予測性調査

### 項目

予測性調査は、先に行われた親密度調査において、母語話者によって親密度が高いと判断された上位 300 個の慣用句を対象とした。それらの慣用句をランダムに 10 リストに振り分けた。また、慣用句が調査対象となっていることを隠すために、調査の際はフィラーとして、各リストに慣用句を構成しない「名詞+助詞」15 個を加えた<sup>12</sup>。

### 協力者

予測性調査は 2017 年 11 月～12 月の期間において行った。Lancers を通して全部で 300 人（平均年齢＝37.4、年齢範囲＝18～68 歳）の日本語母語話者を募集した。各リストに 30 人の協力者が参加した。

### 手順

予測性調査の説明文は以下の通りである。

この調査は、調査協力者のみなさんに、与えられた語句を使って自由に続きを書いていただくものです。あまり深く考えず、与えられた語句から最初に頭に浮かんだ自然な続きを記入するようにしてください。

例えば、「花が \_\_\_\_\_」が提示されたとします。もし、最初に思い浮かんだのは「花が咲く」でしたら、空欄に「咲く」と記入してください。

気になるものもあるかと思いますが、解答した後は前に戻らず次の項目に進んで下さい。一つの項目にあまり時間をかけずに、最初に頭に浮かんだ続きの表現を記入して進めて下さい。

答えに正解、不正解はありません。

<sup>12</sup> フィラーとして「肘を/歯を/髪を/車を/汗が/病気が/仕事を/注意を/雨が/値段が/椅子に/電話で/恋に/本気で/指で」を使用した。フィラーに関して、調査が行われた後に、「注意を \_\_\_\_\_」と「歯を \_\_\_\_\_」の場合、「注意を払う」と「歯を食いしばる」も本稿における慣用句の定義に当てはまることに気づいたが、それ以外の 13 個のものは慣用句を構成しないため、フィラーは全体的に調査の際に協力者が慣用句を想起する確率を下げることができ、慣用句が調査対象となっていることを隠すという目的に適うと言える。よって、予測性調査の結果は信頼できると考えられる。

調査の際に、「慣用句の最初の名詞+助詞」を提示し、その続きの表現を協力者に予測してもらった。例えば、「首を切る」という慣用句の予測性を調査する場合、最初の名詞「首」とそれに続く助詞「を」を、「首を\_\_\_\_\_」のように提示し、表現の続きを協力者に予測してもらった。この例に関して、協力者は空欄の部分に「切る」「ひねる」「突っ込む」「長くする」といった表現を書くことが可能である。

協力者は説明文と同意書を読んだ後に、「作業開始」のボタンをクリックし、作業画面に入る。調査項目はウェブページの上部から下部へ順番に表示されている。協力者は1つの項目に対して、提示された日本語文字列を見た後に、キーボードを使用して続きの日本語表現を入力し、スクロールで次の項目へ進む。

### 3 結果と考察

親密度調査において親密度が高いと判断された上位 300 個の慣用句の親密度、透明度、予測性のデータを付録に提示する<sup>13</sup>。データは親密度の昇順に並んでいる。項目ごとに、親密度の平均・標準偏差、透明度の平均・標準偏差を提示している。予測性に関して、慣用句に使用されている動詞の産出率を報告している。以下では親密度、透明度、予測性の順に、それぞれの調査結果について述べていく。

#### 3.1 親密度

5 個のダミー慣用句の親密度の平均を計算したところ、「足を汚す」が一番高く評価され（平均=3.11）、「首を伸ばす」は2番目に高かった（平均=2.78）。残った3つのダミー慣用句の親密度は平均が2以下であった（花が落ちる=1.60、古着を着る=1.68、ろうそくを燃やす=1.80）。「足を汚す」の平均が高かった理由として、日本語には「手を汚す」「足を洗う」のような、形式的に類似する慣用句が存在することが考えられる。更に、「悪いことをする」という偽作の慣用的意味は「手を汚す」「足を洗う」が表す慣用的意味にも関連するため、協力者は間違えて判断しやすい。以上に基づき、「足を汚す」は既存の日本語慣用句と類似度が高すぎるため、ダミーとして相応しくないと考え、データ採用時の判断基準から外した。以上を踏まえ、残った4つのダミー慣用句をデータ採用時の判断基準として使用し、ダミー慣用句に対して、いずれかの親密度を3以上と判断した場合、当該協力者は親密度調査の説明文をよく理解できず、親密度を判断する際に慣用的意味を読んでいない可能性が高いと判断し、その協力者のデータを採用しないことにした。

結果、親密度が一番高い慣用句は「調子に乗る（平均=6.95, 標準偏差=0.21）」、「面倒を見る（平均=6.95, 標準偏差=0.22）」、「気が付く（平均=6.95, 標準偏差=0.22）」であることが分かった。親密度が一番低い慣用句は「丙丁に付す（平均=1.00, 標準偏差

<sup>13</sup> 親密度調査の対象は全部で 1140 個の日本語動詞慣用句であったが、紙面の制限上、親密度が上位 300 の慣用句のみを提示する。

＝0.00) 」である。この慣用句は、現在の日本語母語話者の日常生活において実際に使用されていないと考えられる。

項目ごとの標準偏差を見れば、「丙丁に付す」のような、協力者の間に判断の揺れが見られなかった項目もあれば、「目先が利く(平均＝4.50, 標準偏差＝2.46)」のような、協力者の間に大きな揺れが見られる項目もある。親密度は話者がどの程度ある慣用句を見たり、聞いたり、使用したりするかを基準としており、話者の接触経験と深く関わるため、個人経験の違いによって親密度判断の揺れが生じると考えられる。よって、本稿で得られたデータを参考に日本語慣用句を選出する際には、親密度の平均値のみではなく、標準偏差も考慮に入れる必要があると考えられる。標準偏差の大きい項目は、異なる協力者グループになると、親密度判断の値も大きく変わる可能性がある。

### 3.2 透明度

5 個のダミー慣用句の透明度の平均を計算したところ、いずれも透明度が低いと判断されていることが分かった(油を嘔む＝1.91、馬車から落ちる＝1.90、風を打つ＝2.34、つるべを蹴る＝1.99、町を塗る＝2.24)。よって、この 5 個の偽造慣用句の判断結果はデータ採用時の基準として相応しいと判断した。集計する際に、5 個のダミー慣用句に対して、いずれかの透明度を 3 以上と判断した場合、当該協力者のデータを採用しないことにした。300 個の日本語動詞慣用句の中で、透明度が一番低いと判断されたのは「焼き餅を焼く(平均＝1.27, 標準偏差＝0.63)」であり、透明度が一番高いと判断されたのは「機嫌が直る(平均＝6.73, 標準偏差＝0.55)」である。

また、親密度判断と同様に、項目ごとの標準偏差を見れば、「神経が高ぶる(平均＝6.61, 標準偏差＝0.50)」のような、協力者の間に判断の揺れが見られなかった項目もあれば、「手を加える(平均＝4.20, 標準偏差＝2.28)」のような、協力者の間に大きな揺れが見られる項目もある。親密度は話者の接触経験を反映しており、親密度判断の揺れは話者の個人経験によるものと考えられる。一方で、透明度判断の個人差は一見すると、個人経験と直接的な関係がなさそうであるが、Keysar & Bly (1995) と陳 (2016) の結果を見ると、透明度判断は個人経験と関係していると考えられる。Keysar & Bly (1995) は慣用句の透明度に関する調査を行い、母語話者が一旦慣用句の慣用的意味を学習すれば、脳内でその意味と慣用句の文字通りの意味を関連づけようとする主張している。また、陳 (2016) は日本語慣用句を対象に、透明度と親密度の関係について調査を行い、第一言語か第二言語かに関わらず、透明度判断は話者の親密度に影響されるという結果を示している。陳 (2016) は、話者がある慣用句に接触する機会が増えるにつれ、その慣用句の親密度が高くなり、慣用句の文字通りの意味と慣用的意味の間の関連性を見出そうとするプロセスが脳内で繰り返され、最終的に慣用句の透明度が高く感じると述べている。

以上の先行研究を見れば、透明度判断が表す話者の脳内における慣用句の文字通りの意味と慣用的意味の関連性は、話者の個人経験と関連していると考えられる。よって、本稿

で得られたデータを参考に日本語慣用句を選出する際に、透明度の平均値のみではなく、それぞれの項目の標準偏差も考慮に入れる必要があると考えられる。標準偏差の大きい項目は、協力者によって、透明度判断の値が変わる場合がある。

### 3.3 予測性

調査の結果を集計する際は Titone & Connine (1994b) を参考にし、空欄の部分に現れた全ての表現を記録し、それぞれの出現率を計算した。動詞が異なる活用形で産出された場合、または表現の表記が異なる場合、最終的には全ての形式をまとめて計算に入れた。例えば、「手が\_\_\_\_\_」という項目に関して、「あく/空く/空いた/空いている」が 1 回ずつ出現した場合、まとめて「あく」が 4 回出現したと計算した。回答の中に表現が不自然なものがある場合(例:羽目を\_\_\_\_休める)、当該協力者のデータを採用しないことにした。それぞれの表現の出現率を計算した後に、「あく」という動詞の出現率を「手が空く」という慣用句の予測性とすることができる。予測性の範囲は 0~1 となる。

予測性調査の結果を集計したところ、300 個の日本語動詞慣用句の予測性の平均は 0.34 (34%) であり、標準偏差は 0.35 である。予測性が一番低く、つまり予測性が 0 である慣用句は 34 個あり、予測性が一番高く、つまり予測性が 1 である慣用句は 13 個ある。例を挙げると、「火を通す/顔が売れる/気が抜ける」といった慣用句は予測性が低く、それぞれの項目において、協力者の中に「通す/売れる/抜ける」と書いた人はいなかった。それに対して、「癩に障る/無駄口を叩く/調子に乗る」といった慣用句は予測性が高く、それぞれの項目において、全員の協力者が「障る/叩く/乗る」を産出した。一方、「釘をさす」の予測性は 0.5 (50%) であり、つまり、「釘を\_\_\_\_\_」という項目において、半分の協力者は「さす」という動詞を空欄に記入した。

### 3.4 各調査の結果の相関関係

最後に、Titone & Connine (1994b)、Libben & Titone (2008)、Tabossi 他 (2011) と同様に、各調査の結果の間の相関関係について分析を行った。解析には統計ソフト R ver-3.3.0 (R Core Team 2016) を使用し、相関係数を求める `cor.test` 関数を用いた。相関分析の結果は表 1 の通りである。

表 1 親密度・透明度・予測性の相関関係

	親密度	透明度	予測性
親密度	1.0	.05	.06
透明度	—	1.0	.07
予測性	—	—	1.0

表 1 が示すように、親密度と透明度 ( $r=.05$ )、親密度と予測性 ( $r=.06$ )、透明度と予測性

( $r=.07$ )の間はいずれも有意な結果を示さず、それぞれの調査の結果の間には相関関係が見られなかった。つまり、本稿の親密度調査の結果に基づいて選出した親密度が上位 300 の日本語慣用句において、親密度、透明度、予測性の性質はそれぞれの間に線的な関係が見られない。

透明度と予測性の中に相関関係がないことから、母語話者にとって、ある慣用句形式を予測しやすいか否かは、その慣用句の文字通りの意味と慣用的意味が関連するか否かと関係がないことが分かる。Titone & Connine (1994b)、Libben & Titone (2008)、Tabossi 他 (2011) は透明度を対象としていないが、透明度と類似する構成性について調査を行い、構成性と予測性の相関関係について分析を行った。結果、いずれの研究においても、構成性と予測性の中に相関関係は見られなかった。

また、本稿において透明度と親密度の間にも相関関係が見られなかった。つまり、親密度が上位 300 の慣用句の場合、言語使用者がある慣用句の文字通りの意味と慣用的意味の間に関連性を感じるか否かは、どの程度その慣用句を見聞きしているかと関係していない。一方、陳 (2016) は混合線形モデルを用いて、言語使用者の慣用句の親密度が高くなると、その慣用句に対する透明度判断も高くなるということを明らかにした。陳 (2016) によると、透明度は個々の慣用句が持つ性質の 1 つであり、本来なら透明度の低いものは親密度が上がることで、透明度の高い慣用句と同じ程度に文字通りの意味と慣用的意味の関連性が見出しやすくなることはなく、透明度判断の変化には慣用句の種類による要因が影響するか否かについて更に検討する必要がある。よって、透明度と親密度の間の関係は慣用句の種類に影響される可能性があると考えられる。

Titone & Connine (1994b)、Libben & Titone (2008)、Tabossi 他 (2011) は親密度と構成性の相関関係について分析を行ったが、Titone & Connine (1994b)、Tabossi 他 (2011) の場合、親密度<sup>14</sup>と構成性<sup>15</sup>の間に相関関係は見られなかった。一方、Libben & Titone (2008) によると、構成性<sup>16</sup>と親密度の相関関係が見られた。構成性と透明度の性質が類似しているため、構成性に関する結果の違いも、慣用句の種類による要因が影響していることによって説明できる可能性がある。

予測性と親密度の相関関係について、Titone & Connine (1994b)、Libben & Titone (2008)、

<sup>14</sup> Titone & Connine (1994b) において、親密度の指標として①慣用句を見たり聞いたりする頻度、②慣用句の意味をどの程度知っているか、の 2 つの調査が行われたが、前者は本稿における親密度調査と判断基準が一致していると考えられる。よって、以下では本稿の結果と比較するために①慣用句を見たり聞いたりする頻度に関する結果のみを取り上げる。

<sup>15</sup> Titone & Connine (1994b) は構成性を調査する際に、非構成性 (Nondecomposability)・異常構成性 (Abnormal Decomposability)・正常構成性 (Normal Decomposability) といった 3 つの尺度を使用しているが、いずれの尺度においても親密度との相関関係、予測性との相関関係が見られなかった。

<sup>16</sup> Libben & Titone (2008) は Titone & Connine (1994b) を参考に構成性調査を行ったが、Titone & Connine (1994b) と異なり、全体的構成性 (Global Decomposability Proportion)、動詞構成性 (Verb Decomposability)、名詞構成性 (Noun Decomposability)、正常構成性 (Normal Decomposability Proportion) といった 4 つの尺度を用いた。構成性と予測性の相関について、いずれの尺度においても相関関係が見られなかった。構成性と予測性の相関について、動詞構成性を除き、他の 3 つの尺度においては相関関係が見られた。

Tabossi 他 (2011) は全て両者の間に相関関係があるという結果を示した。Titone & Connine (1994b) の結果を見れば、慣用句の親密度と慣用句の予測性の間には有意な相関が見られた ( $r=.327^{**}$ )。また、Libben & Titone (2008) の結果も、親密度と予測性の中に相関関係があることを示した ( $r=.41^{*}$ )。Tabossi 他 (2011) の場合、Titone & Connine (1994b)、Libben & Titone (2008) と比べ親密度と予測性の中の相関関係が比較的弱い、結果は有意であった ( $r=.21^{*}$ )。よって、親密度と予測性の間は一定の関係があり、親密度の高い慣用句は予測性が高く、または予測性の高い慣用句は親密度が高いと考えられる。Titone & Connine (1994b) によると、親密度と予測性の中の相関関係は、慣用句における単語間の連結の重みが親密度によって影響されることを示唆している可能性がある。

それに対して、本稿においては親密度調査と予測性調査の結果の間に相関関係が見られず、一致する結果が得られなかった。その理由について考えると、Titone & Connine (1994b) が対象としている慣用句の親密度 (慣用句を見たり聞いたりする頻度) の平均は 4.49 であり、標準偏差は 1.23 である。Tabossi 他 (2011) が対象としている慣用句の親密度の平均は 5.7 であり、標準偏差は 0.7 である。一方、本稿の透明度調査と予測性調査は親密度の高い慣用句 (平均=6.40, 標準偏差=0.45) のみを対象としているため、Titone & Connine (1994b)、Tabossi 他 (2011) と比べ親密度の幅が狭い。本稿の場合、慣用句の親密度が高いほうに偏っていたことが、親密度と予測性の中の相関関係が検出されなかったことの原因になると考えられる。

#### 4 終わりに

本稿は Titone & Connine (1994b)、Libben & Titone (2008)、Tabossi 他 (2011) を参考に、まず 1140 個の日本語動詞慣用句を対象に親密度調査を行い、次に、日本語母語話者の親密度判断に基づき、親密度が上位 300 の慣用句を対象に透明度調査と予測性調査を行った。慣用句の親密度調査、透明度調査において、協力者の間に揺れが見られるため、研究を行う際は実際に実験に参加する協力者を対象に実験項目となる慣用句の親密度と透明度を調査する必要があるが、母語話者にとって既知である慣用句の認知過程について実験を行う今後の研究は、本稿が提示した各慣用句の平均値と標準偏差を参考に、実験対象の候補となる慣用句項目を選出することができると考えられる。

また、第二言語学習者は知っている慣用句が少ないが、学習者にとって親密度のある慣用句は母語話者の場合親密度がより高いと考えられ、日本語学習者を対象とする慣用句の実験研究は本稿で提示した親密度が上位 300 の慣用句の中から予備慣用句を選出することができる。一方、親密度が上位 300 の慣用句は日本語母語話者にとって日常最もよく見聞きする慣用句であると考えられ、日本語教育においてどのような慣用句を学習者に教えるかを考える際に参考になると考えられる。

ただし、本稿が提示した記述的データは親密度の高い日本語慣用句に限るため、母語話者にとって未知の慣用句を対象とする実験の参考にはなりにくい。また、本稿で取り上げ

た親密度、透明度、予測性の他に、慣用句の字義性、動詞の使用頻度、慣用句の長さなどの要因も慣用句の認知過程に影響する可能性があると考えられるため (Tabossi 他 2009)、今後の研究は、実験目的や実験方法に合わせ、本稿の結果を参考に候補となれる慣用句項目を選出した後に、更に字義性、動詞の使用頻度、慣用句の長さといった側面について確認する必要があるかもしれない。例えば、Tabossi 他 (2009) と同様に慣用句の反応時間を測定する実験を行う場合、以上に述べた要因の他に、慣用句に含まれる動詞の反応時間を統一することも求められる。

### 参考文献

- 北原保雄 (編) (2010) 『明鏡国語辞典 第 2 版』 大修館書店
- 小比田涼介・宮本エジソン正 (2014) 「Twitter 上でのシャイなユーザーの自己開示」『電子情報通信学会技術研究報告』 113 (440): 7-12.
- 三省堂編修所 (2010) 『三省堂 故事ことわざ・慣用句辞典 第二版』 三省堂
- 陳雯 (2015) 「第二言語使用における慣用句の回避現象 — 第一言語慣用句との類似度に着目して—」『言語学論叢』 オンライン版 (8): 84-100.
- 陳雯 (2016) 「慣用句の透明度と親密度の関係について — 日本語母語話者と学習者判断の比較から—」『筑波応用言語学研究』 (23): 15-30.
- 宮地裕 (編) (1982) 『慣用句の意味と用法』 明治書院
- 宮地裕 (1985) 「慣用句の周辺—連語・ことわざ・複合語—」『日本語学』 4 (1): 62-75.
- Abel, B. (2003). English idioms in the first language and second language lexicon: A dual representation approach. *Second Language Research*, 19(4), pp.329-358.
- Aljabri, S. S. (2013). EFL Students' Judgments of English Idiom Familiarity and Transparency. *Journal of Language Teaching and Research*, 4 (4): 662-669.
- Cacciari, C., & Tabossi, P. (1988). The comprehension of idioms. *Journal of Memory and Language*, 27 (6): 668-683.
- Cieślicka, A. B. (2013). Second language learners' processing of idiomatic expressions: Does compositionality matter?. In *Psycholinguistic and sociolinguistic perspectives on second language learning and teaching* (115-136). Springer, Berlin, Heidelberg.
- Conklin, K., & Schmitt, N. (2008). Formulaic sequences: Are they processed more quickly than nonformulaic language by native and nonnative speakers? *Applied Linguistics*, 29 (1): 72-89.
- Cooper, T. C. (1999). Processing of idioms by L2 learners of English. *TESOL Quarterly*, 33(2): 233-262.
- Gibbs, R. W. (1987). Linguistic factors in children's understanding of idioms. *Journal of Child Language*, 14 (3): 569-586.
- Gibbs, R. W., & Nayak, N. P. (1989). Psycholinguistic studies on the syntactic behavior of idioms. *Cognitive Psychology*, 21(1): 100-138.

- Gibbs, R. W., Nayak, N. P., & Cutting, C. (1989). How to kick the bucket and not decompose: Analyzability and idiom processing. *Journal of Memory and Language*, 28 (5): 576-593.
- Grant, L., & Bauer, L. (2004). Criteria for Re-defining Idioms: Are we Barking up the Wrong Tree? *Applied Linguistics*, 25 (1): 38-61.
- Ishida, P. (2009). The effect of transparency on L2 idiom interpretation. *Tsukuba Journal of Applied Linguistics*, 16: 15-30.
- Keysar, B., & Bly, B. (1995). Intuitions of the transparency of idioms: Can one keep a secret by spilling the beans? *Journal of Memory and Language*, 34 (1): 89-109.
- Lewellen, M. J., Goldinger, S. D., Pisoni, D. B., & Greene, B. G. (1993). Lexical familiarity and processing efficiency: Individual differences in naming, lexical decision, and semantic categorization. *Journal of Experimental Psychology: General*, 122 (3): 316.
- Libben, M. R., & Titone, D. A. (2008). The multidetermined nature of idiom processing. *Memory & Cognition*, 36 (6): 1103-1121.
- Liu, D. (2008). *Idioms: Description, Comprehension, Acquisition, and Pedagogy*. Routledge.
- Nippold, M. A., & Rudzinski, M. (1993). Familiarity and transparency in idiom explanation: A developmental study of children and adolescents. *Journal of Speech, Language, and Hearing Research*, 36 (4): 728-737.
- Nippold, M. A., & Taylor, C. L. (2002). Judgments of idiom familiarity and transparency: A comparison of children and adolescents. *Journal of Speech, Language, and Hearing Research*, 45 (2): 384-391.
- Nunberg, G., Sag, I. A., & Wasow, T. (1994). Idioms. *Language*, 70 (3): 491-538.
- R Core Team (2016). R: A language and environment for statistical computing. R Foundation for Statistical Computing, Vienna, Austria. URL <https://www.R-project.org/>.
- Schweigert, W. A. (1986). The comprehension of familiar and less familiar idioms. *Journal of Psycholinguistic Research*, 15 (1): 33-45.
- Swinney, D. A., & Cutler, A. (1979). The access and processing of idiomatic expressions. *Journal of Verbal Learning and Verbal Behavior*, 18 (5): 523-534.
- Tabossi, P., Arduino, L., & Fanari, R. (2011). Descriptive norms for 245 Italian idiomatic expressions. *Behavior Research Methods*, 43 (1): 110-123.
- Tabossi, P., Fanari, R., & Wolf, K. (2009). Why are idioms recognized fast? *Memory & Cognition*, 37 (4): 529-540.
- Titone, D. A., & Connine, C. M. (1994a). Comprehension of idiomatic expressions: Effects of predictability and literalness. *Journal of Experimental Psychology: Learning, Memory, and Cognition*, 20 (5): 1126-1138.
- Titone, D. A., & Connine, C. M. (1994b). Descriptive norms for 171 idiomatic expressions: Familiarity, compositionality, predictability, and literalness. *Metaphor and Symbol*, 9 (4): 247-270.

Titone, D. A., & Connine, C. M. (1999). On the compositional and noncompositional nature of idiomatic expressions. *Journal of Pragmatics*, 31 (12): 1655-1674.

(陳雯 筑波大学大学院生 yohilly@yahoo.co.jp)

付録 300 個の日本語動詞慣用句の親密度・透明度・予測性

項目	親密度		透明度		予測性
	平均 (Mean)	標準偏差 (SD)	平均 (Mean)	標準偏差 (SD)	平均 (Mean)
角が立つ	6.00	1.26	2.65	1.42	0.59
口を開く	6.00	1.09	5.27	1.67	0.08
腰が抜ける	6.00	1.30	4.30	2.00	0.04
財布を握る	6.00	1.30	4.75	1.37	0.03
策を講じる	6.00	0.97	6.64	0.66	0.07
手を引く	6.00	1.41	3.05	1.50	0.02
手を焼く	6.00	1.30	2.71	1.62	0.03
手を離れる	6.00	1.26	3.41	2.22	0.00
足を踏み入れる	6.00	1.15	3.71	1.82	0.00
袖を通す	6.00	1.13	5.55	0.94	0.16
宙に浮く	6.00	1.12	5.05	1.40	0.64
面子を立てる	6.00	1.41	3.65	1.23	0.04
目を見張る	6.00	1.17	5.10	1.52	0.08
目を奪う	6.00	1.34	3.61	1.97	0.00
油を注ぐ	6.00	1.31	4.95	1.36	0.76
目が肥える	6.04	1.34	3.10	1.89	0.00
目玉が飛び出る	6.04	1.46	3.60	1.88	0.79
不意を突く	6.04	1.23	5.35	1.50	0.84
芝居を打つ	6.04	1.15	2.90	1.71	0.19
宙に舞う	6.04	1.43	5.04	1.52	0.25
血がつながる	6.05	1.53	4.39	1.75	0.00
心に留める	6.05	1.02	4.15	1.73	0.04
夢を描く	6.05	1.36	4.85	2.01	0.00
花を添える	6.05	1.23	4.70	1.81	0.04
胸に刻む	6.05	1.19	3.00	1.81	0.21
血相を変える	6.05	1.10	5.65	1.23	0.97
骨が折れる	6.05	1.57	3.35	1.95	0.66
神経を尖らす	6.05	1.47	3.95	1.83	0.11
片棒を担ぐ	6.05	1.64	5.50	1.32	0.97
目が据わる	6.05	1.32	4.23	1.63	0.01
用を足す	6.05	1.54	3.70	1.75	0.59
肝を冷やす	6.08	1.47	3.70	1.66	0.71
勝手を知る	6.09	1.44	4.24	1.51	0.07
小耳に挟む	6.09	1.35	4.09	1.69	0.97
度胸が据わる	6.09	1.28	6.10	1.18	0.23
音を上げる	6.09	1.06	2.26	1.48	0.07
肩を落とす	6.09	1.31	4.15	1.87	0.09
口火を切る	6.09	1.44	3.27	1.39	0.96
事を起こす	6.09	1.02	5.83	1.34	0.19
心を打つ	6.09	0.97	3.70	2.18	0.02
気が抜ける	6.10	1.37	5.70	1.26	0.00
熱が冷める	6.10	1.18	4.20	1.82	0.10
罰が当たる	6.10	1.70	5.50	1.15	0.33
面目が潰れる	6.10	1.22	6.00	1.52	0.12
ひびが入る	6.10	1.02	4.64	1.84	0.89
泣きを入れる	6.10	1.29	3.59	1.53	0.11
口を慎む	6.10	1.37	5.90	1.09	0.02
骨を埋める	6.10	1.65	3.00	1.78	0.00
焦点を絞る	6.10	1.59	4.30	1.72	0.07
足下を見られる	6.10	1.02	2.60	1.19	0.76

項目	親密度		透明度		予測性
	平均 (Mean)	標準偏差 (SD)	平均 (Mean)	標準偏差 (SD)	平均 (Mean)
幕があく	6.10	1.21	5.85	1.39	0.25
名が売れる	6.10	1.21	4.62	1.83	0.08
面目を失う	6.10	1.33	5.65	1.35	0.07
目が留まる	6.10	1.48	5.55	1.54	0.00
頭を下げる	6.12	1.03	5.38	1.07	0.01
口裏を合わせる	6.13	1.26	4.10	1.33	0.96
耳に障る	6.13	1.14	4.65	1.50	0.01
猫を被る	6.13	1.25	2.13	1.42	0.00
度胆を抜く	6.14	1.35	4.65	1.50	0.44
愛想が尽きる	6.15	1.39	6.05	1.23	0.11
顎で使う	6.15	1.23	4.05	1.81	0.83
桁が違う	6.15	1.27	5.15	1.69	0.80
鯖を読む	6.15	1.69	1.45	0.69	0.38
山場を迎える	6.15	1.46	5.90	1.21	0.36
耳を塞ぐ	6.15	1.04	5.45	1.70	0.13
尻に敷く	6.15	1.18	3.30	2.00	0.77
足が出る	6.15	1.04	2.19	1.29	0.00
地に落ちる	6.15	1.04	5.10	1.21	0.53
明暗を分ける	6.15	1.14	4.52	2.16	0.96
波に乗る	6.15	0.92	4.30	1.75	0.54
言葉を濁す	6.16	1.25	4.85	1.18	0.08
芽を摘む	6.18	1.05	5.45	1.43	0.39
手が塞がる	6.18	1.14	4.25	1.92	0.02
種を蒔く	6.18	1.05	4.19	1.86	0.93
心を奪われる	6.19	1.44	4.55	1.92	0.03
酔いが回る	6.19	1.36	4.87	2.07	0.45
背を向ける	6.19	1.25	3.75	1.77	0.68
ピッチを上げる	6.20	0.89	5.85	1.23	0.92
胸ぐらをつかむ	6.20	1.15	6.20	0.95	0.96
穴を埋める	6.20	1.24	5.00	1.41	0.04
肩を持つ	6.20	1.28	2.96	2.03	0.02
手を打つ	6.20	1.11	2.50	1.50	0.01
声が潰れる	6.20	1.06	5.95	1.20	0.00
値が張る	6.20	1.20	3.60	1.82	0.57
腹を抱える	6.20	1.20	3.20	1.85	0.06
目が眩む	6.20	1.40	3.65	1.73	0.10
路頭に迷う	6.20	1.20	4.70	1.38	0.96
我を通す	6.22	1.28	5.75	0.79	0.10
無駄口を叩く	6.22	1.09	5.20	1.51	1.00
胸が高鳴る	6.23	1.11	5.40	1.50	0.12
首が飛ぶ	6.23	1.07	3.70	1.53	0.00
目を背ける	6.23	1.27	5.68	1.86	0.01
気に掛ける	6.23	0.95	5.26	1.48	0.18
口を封じる	6.25	1.16	4.55	1.85	0.00
腰を抜かす	6.25	1.59	4.24	1.79	0.04
寿命が縮まる	6.25	0.97	4.70	1.49	0.13
頭を痛める	6.25	0.97	4.05	1.47	0.00
方を付ける	6.25	1.02	2.75	1.59	0.42
目をつぶる	6.25	1.48	4.85	1.90	0.07
目を光らせる	6.25	1.07	3.90	1.89	0.00

項目	親密度		透明度		予測性
	平均 (Mean)	標準偏差 (SD)	平均 (Mean)	標準偏差 (SD)	
門前払いを食う	6.25	1.25	4.95	2.03	0.67
欲が出る	6.25	1.02	6.05	0.86	0.56
知恵を借りる	6.26	1.01	6.10	1.17	0.07
店を畳む	6.26	1.54	3.76	2.00	0.07
バトンを渡す	6.27	1.16	5.85	1.27	0.93
ピントが外れる	6.27	0.98	5.00	1.59	0.04
骨を折る	6.27	0.88	2.50	1.00	0.76
手を抜く	6.27	1.39	2.57	1.72	0.00
道草を食う	6.27	0.88	2.23	1.77	0.70
目に余る	6.27	1.08	2.95	1.56	0.25
場数を踏む	6.29	1.23	5.40	1.57	0.92
原点に帰る	6.30	0.92	6.05	1.07	0.50
手を延ばす	6.30	0.92	3.65	1.84	0.03
不評を買う	6.30	0.92	3.09	1.78	0.67
本音を吐く	6.30	0.92	6.35	1.42	0.13
本腰を入れる	6.30	1.08	3.78	2.02	0.93
幕を閉じる	6.30	1.22	4.52	1.47	0.22
理に適う	6.30	0.92	6.65	0.67	1.00
媚を売る	6.30	1.34	5.35	1.35	0.81
横槍を入れる	6.30	1.11	4.40	1.82	0.84
先を争う	6.30	1.64	4.90	1.77	0.03
名を連ねる	6.30	1.02	6.38	0.67	0.00
身に沁みる	6.31	1.05	5.27	1.61	0.23
自腹を切る	6.32	1.46	3.90	1.68	0.93
頭を抱える	6.32	1.09	5.40	0.68	0.29
道が開ける	6.32	1.21	4.30	1.87	0.17
白紙に戻す	6.32	1.21	4.67	2.13	0.46
不発に終わる	6.32	0.95	4.20	1.51	0.93
首をかしげる	6.33	1.02	5.29	1.42	0.48
馬鹿を見る	6.33	1.15	3.40	1.70	0.48
手をつなぐ	6.35	1.07	5.55	1.79	0.22
肝が据わる	6.35	1.31	3.55	1.60	0.69
血が騒ぐ	6.35	0.93	3.39	1.88	0.15
手を組む	6.35	1.18	3.85	1.81	0.01
心を許す	6.35	0.88	3.30	2.27	0.01
神経が高ぶる	6.35	1.31	6.61	0.50	0.07
身を投げる	6.35	0.81	4.65	1.73	0.00
水に流す	6.35	1.09	2.95	1.54	0.33
棚に上げる	6.35	1.27	3.75	1.71	0.21
目を疑う	6.35	1.14	5.24	1.58	0.02
熱が入る	6.36	1.08	4.50	1.64	0.00
初心に戻る	6.36	0.79	6.48	0.81	0.79
水を差す	6.36	0.73	3.05	1.67	0.08
飽きが来る	6.36	0.79	6.32	0.89	0.96
畏にはまる	6.36	1.18	5.35	1.42	0.59
先を読む	6.38	0.97	5.90	1.17	0.11
的を絞る	6.38	0.97	3.48	1.50	0.07
口に合う	6.38	1.12	4.62	1.91	0.07
耳を傾ける	6.38	1.32	3.83	1.83	0.20
顔を立てる	6.39	1.03	2.60	1.35	0.14

項目	親密度		透明度		予測性
	平均 (Mean)	標準偏差 (SD)	平均 (Mean)	標準偏差 (SD)	平均 (Mean)
不意を打つ	6.39	1.23	4.67	1.32	0.07
役者が揃う	6.39	0.99	5.80	1.36	0.55
手を切る	6.40	1.23	3.05	1.73	0.00
当てが外れる	6.40	1.10	5.52	1.59	0.83
鼻で笑う	6.40	0.99	4.43	1.83	0.92
痺れを切らす	6.40	0.99	3.75	1.97	0.72
癩に障る	6.40	0.75	4.57	1.65	1.00
機転が利く	6.41	0.96	6.55	0.69	0.89
耳に残る	6.41	1.18	5.70	1.72	0.10
声が弾む	6.41	1.01	5.23	1.90	0.00
軌道に乗る	6.42	0.88	5.20	1.51	0.92
火を通す	6.43	1.12	5.05	2.11	0.00
胸が痛む	6.43	1.03	5.14	1.42	0.22
耳に入る	6.43	1.12	5.14	1.59	0.21
釘をさす	6.43	0.99	3.05	1.54	0.50
肌で感じる	6.43	0.84	5.57	1.21	1.00
目を配る	6.44	0.96	3.90	2.02	0.02
ポイントを稼ぐ	6.45	0.89	5.38	1.63	0.15
火花を散らす	6.45	0.76	3.55	2.09	0.93
手が届く	6.45	0.83	4.85	1.66	0.00
手を広げる	6.45	1.00	4.25	1.55	0.01
心に刻む	6.45	0.89	3.30	2.14	0.14
図に乗る	6.45	1.00	2.60	1.57	0.81
念を押す	6.45	0.89	3.75	1.55	0.46
味を占める	6.45	0.94	2.65	1.42	0.34
夢に見る	6.45	0.89	4.87	1.60	0.55
目が回る	6.45	0.94	4.52	1.63	0.04
目が届く	6.45	1.15	4.65	1.81	0.01
目を離す	6.45	1.00	3.95	2.01	0.02
話に乗る	6.45	0.83	3.90	1.70	0.19
神経を使う	6.45	0.96	4.85	1.81	0.37
目を凝らす	6.45	1.06	5.80	1.28	0.11
頭に入れる	6.46	0.93	5.45	1.57	0.00
手を加える	6.48	0.81	4.20	2.28	0.00
頭が下がる	6.48	0.87	5.50	1.34	0.08
顔を出す	6.48	0.99	4.90	1.45	0.14
羽目を外す	6.50	0.93	2.24	1.45	1.00
顔が売れる	6.50	0.89	4.05	1.86	0.00
顔色を見る	6.50	1.01	5.35	1.57	0.00
気が沈む	6.50	0.80	5.45	1.70	0.01
気に障る	6.50	0.76	6.20	0.95	0.17
口を揃える	6.50	0.89	5.15	2.01	0.02
紙面をにぎわす	6.50	0.83	5.40	1.35	0.17
耳を貸す	6.50	0.83	4.35	1.23	0.04
世に出る	6.50	0.69	4.35	1.42	0.44
体を張る	6.50	0.76	3.57	1.86	0.00
反感を買う	6.50	0.83	3.43	1.75	1.00
明日に備える	6.50	0.74	6.17	0.78	0.20
目が冴える	6.50	0.74	4.40	1.96	0.00
屁理屈をこねる	6.50	0.61	4.75	1.71	0.28

項目	親密度		透明度		予測性
	平均 (Mean)	標準偏差 (SD)	平均 (Mean)	標準偏差 (SD)	平均 (Mean)
気を許す	6.52	0.90	5.35	1.31	0.02
耳を疑う	6.52	1.36	4.35	1.81	0.07
焼き餅を焼く	6.55	1.06	1.27	0.63	0.65
人目を盗む	6.55	0.91	5.27	1.70	0.07
白星をあげる	6.55	0.80	2.70	2.11	0.59
暇を潰す	6.55	1.00	5.55	1.54	0.10
気を配る	6.55	0.89	5.00	1.38	0.05
肩を並べる	6.55	1.00	4.19	2.09	0.04
手を貸す	6.55	1.15	5.04	1.66	0.02
情が移る	6.55	0.83	5.29	1.45	0.54
跡を絶たない	6.55	1.23	3.75	1.68	0.03
点数を稼ぐ	6.55	0.60	5.10	1.37	0.24
要求をのむ	6.55	0.76	4.71	1.79	0.75
夢を追う	6.56	0.92	3.55	1.99	0.07
真に受ける	6.57	0.87	4.30	2.08	0.77
足を運ぶ	6.57	0.98	5.60	1.10	0.07
理解に苦しむ	6.57	0.87	5.30	2.00	1.00
話が違う	6.58	0.70	5.70	1.42	0.07
羽を伸ばす	6.59	0.91	4.00	2.05	0.52
活を入れる	6.59	0.85	3.85	1.93	0.97
弱音を吐く	6.59	0.73	5.33	1.65	1.00
手があく	6.59	0.73	3.95	1.76	0.01
気を失う	6.60	0.88	6.09	1.38	0.04
胸を打つ	6.60	0.88	3.14	2.01	0.09
筋が通る	6.60	1.19	3.50	1.57	0.46
喧嘩を売る	6.60	0.82	4.70	1.96	0.46
見栄を張る	6.60	0.82	5.80	1.06	0.96
採算が取れる	6.60	0.82	5.70	1.42	0.43
借りを返す	6.60	0.94	4.05	1.79	0.70
手に入る	6.60	0.88	3.90	2.21	0.02
所帯を持つ	6.60	0.88	6.50	1.00	0.96
食が進む	6.60	0.71	4.82	2.22	0.46
不意打ちを食う	6.60	0.60	5.10	1.94	0.62
涙を誘う	6.60	0.82	4.90	1.70	0.00
時間を割く	6.62	0.74	3.60	2.14	0.16
陰口を叩く	6.64	0.66	6.15	0.88	0.76
顔に出る	6.64	0.85	4.95	1.82	0.17
手が込む	6.64	1.09	2.95	1.57	0.00
先が見える	6.64	0.90	4.57	1.93	0.63
心に残る	6.64	1.25	5.60	1.70	0.19
がたが来る	6.65	0.67	6.30	1.13	0.93
胸を張る	6.65	0.67	4.57	1.94	0.48
元が取れる	6.65	0.75	4.45	1.90	0.57
口を挟む	6.65	0.67	3.39	2.06	0.09
止めを刺す	6.65	0.67	6.41	0.85	0.58
席を外す	6.65	0.81	4.67	1.83	0.24
体を壊す	6.65	0.67	5.86	1.06	0.04
知恵を絞る	6.65	0.81	4.50	1.43	0.57
腹を割る	6.65	0.59	2.30	1.63	0.15
ワンクッション置く	6.65	0.65	4.70	1.89	0.81

項目	親密度		透明度		予測性
	平均 (Mean)	標準偏差 (SD)	平均 (Mean)	標準偏差 (SD)	平均 (Mean)
世話を焼く	6.67	0.80	3.65	2.13	0.85
足を引っ張る	6.68	1.07	2.50	1.64	0.05
ベストを尽くす	6.68	0.72	6.55	0.83	0.96
胸が張り裂ける	6.70	0.70	3.81	1.72	0.02
株が上がる	6.70	0.57	4.62	1.91	0.86
甘く見る	6.70	0.66	3.35	1.66	0.46
機嫌が直る	6.70	0.66	6.73	0.55	0.14
機嫌を取る	6.70	0.66	3.45	1.96	0.16
群を抜く	6.70	0.73	5.15	1.27	0.54
肩が凝る	6.70	0.57	6.00	0.95	0.62
実を結ぶ	6.70	0.66	3.95	2.16	0.54
頭を冷やす	6.70	0.66	5.60	0.88	0.03
目をそらす	6.70	0.66	5.76	1.30	0.07
揚げ足を取る	6.70	0.66	2.86	1.74	1.00
話が分かる	6.70	0.57	5.65	0.88	0.04
首を切る	6.72	1.02	3.48	1.94	0.02
首を突っ込む	6.73	0.70	3.00	1.98	0.02
目を通す	6.73	0.78	4.41	1.53	0.00
工夫を凝らす	6.74	0.62	6.25	1.02	0.85
気が引ける	6.75	0.64	4.70	1.36	0.02
耳を澄ます	6.75	0.55	4.87	1.87	0.40
足並みが揃う	6.75	0.64	6.25	1.02	0.92
目に入る	6.75	0.64	6.10	1.12	0.08
話が弾む	6.75	0.64	5.10	1.62	0.20
我に返る	6.77	0.61	5.20	1.20	1.00
口に出す	6.77	0.61	4.19	1.63	0.24
目が覚める	6.77	0.53	5.22	1.17	0.05
相談に乗る	6.78	0.60	5.45	1.57	1.00
我を忘れる	6.80	0.52	5.10	1.52	0.57
気が利く	6.80	0.52	4.75	1.59	0.07
気に入る	6.80	0.70	5.00	1.26	0.02
脚光を浴びる	6.80	0.41	5.23	1.80	1.00
力を貸す	6.80	0.52	5.85	1.23	0.12
気が済む	6.81	0.68	5.81	1.17	0.00
気が散る	6.82	0.59	5.30	0.86	0.26
手を出す	6.82	0.50	3.74	2.03	0.04
世間を騒がせる	6.82	0.39	6.24	0.70	0.30
根に持つ	6.83	0.58	2.43	1.60	0.93
心を込める	6.83	0.56	4.45	1.92	0.03
機嫌を損ねる	6.85	0.37	6.05	1.19	0.45
口を出す	6.85	0.37	3.39	1.62	0.02
頭が切れる	6.85	0.37	2.10	1.71	0.06
頭に來る	6.85	0.49	2.30	1.49	0.83
時間を食う	6.90	0.31	2.95	2.24	0.00
手に入れる	6.90	0.31	3.57	2.11	0.19
腹が立つ	6.90	0.31	2.60	1.79	0.17
力を入れる	6.91	0.42	4.45	1.54	0.23
気が付く	6.95	0.22	4.25	1.77	0.15
面倒を見る	6.95	0.22	3.50	1.61	0.46
調子に乗る	6.95	0.21	4.15	1.63	1.00

# Descriptive Norms for 300 Japanese Idiomatic Expressions: Familiarity, Transparency and Predictability

CHEN Wen

Titone & Connine (1994b) demonstrated that idioms vary along a number of linguistic dimensions, and each of these dimensions has been shown to influence idiom processing in particular or language processing in general. Titone & Connine (1994b) and Tabossi et al. (2011) each provided descriptive norms for English idioms and Italian idioms on the dimensions of familiarity, compositionality, predictability etc. However, there is no similar research providing descriptive norms for Japanese idioms. The present study reports descriptive normative measures for 300 Japanese verb phrase idioms on the dimensions of familiarity, transparency and predictability.